The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	[III]言語理論／フランス語における Est-ce que 型の疑問文について
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57761
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランス語における Est-ce que 型の疑問文について*)

井　元　秀　剛

1. はじめに

現在フランス語において

(1) Pierre est malade.

のような平叙文を oui もしくは non で答える疑問文にする方法は 3 通りある.

(2) a. Pierre est malade ?
b. Pierre est-il malade ?
c. Est-ce que Pierre est malade ?

(2a) は上昇のイントネーションによるもので，最も単純な構造をしており，口語において最も頻繁に現れる形式である．一方 (2b) は倒置という正規の文法手続きに従ったもので，改まった文章などで特によく見られる形式である．これに対し (2c) はちょうどその中間にあたり，(1) の基本形に対し文頭に est-ce que をつければよいだけだから倒置の必要はなく，構造も単純で口語でも文語でも頻繁に用いられている．本稿ではこの (2c) の型の疑問文をとりあげ，通時的な検討も加えた上で，最終的に共時的な観点からそれをどのように分析することが可能か，という問題について考えてみたい.

2. 単純な統語的分析

(2c) は形式上は

(3) C'est que Pierre est malade.

の倒置形になっており，最も素朴な分析は以下のようなものであろう．すなわち，倒置という疑問文を作る統語操作を (1) にそのまま適応すると (2b) のような複雑な形になってしまうので，それを避けるため c'est que という真理条件的な意味には何ら貢献しない表現を (1) の形に補って，倒置をこの部分にまかせることによってできた形式が (2c) というものである．実際筆者自身も含めて，教室でこのように教えている教師はかなり多いだろう．Martinon (1927) Bourciez (1967) などもそのような説明をしている．ところがこの分析には様々な難点があることが，Jones (1669) によって指摘されている．

2.1. 意味的不等価性

素朴な統語分析は，(3) が (1) の代用であり，(1) と (3) が意味的に同じものであるということを前提にしている．しかしながらこの前提は成立しない．(3) は前文脈で提示された内容の説明に用いるものであり，例えば Jones があげる例だが，Pierre の家の前に医者の車が止まっているという状況を目撃した場面で，「ピエールが病気なのだ」と説明するような場合に用いる．これに対し (1) にはこの種の説明のニュアンスは全く存在しない．

このことは実際の用例によっても確かめることができる．

(4) Selon El Mundo, deux tableaux, Comienzo de la tempiesta et La granola, ont trouvé preneur. *C'est que* les Espagnols aiment et défendent l'art de leur pays. (*Le Monde,* 18 février 2003, p. 27)[1)]

(4) はスペインで二つの自国の絵が売れたという事実を提示した上で，c'est que 以下はその事実は，スペイン人が自国の芸術を愛し保護しようと思っているということだ，と前文で提示した事実の解釈を付加しているのである．

この意味的違いはすでに Martinon (1927) でも指摘されている．彼は est-ce que は c'est que の倒置形という説明をしているのだが，非倒置形には説明という意味内容が加わるのに対し，倒置形にそのような意味がないことを認めている．ただし，もともとは非倒置形のような意味があったかもしれないが，現在はより一般的な意味になり，*ceci est-il vrai, ceci existe-t-il,* à savoir, *que* . . . (イタリックも原著) のように解されると説明を加えている．しかしこの説明は共時的な分析に通時的な説明を持ち込むことであり，あまりよい解決法であるとはいえない．また

そもそも通時的事実は c'est que から est-ce que が派生したわけではない．従って純粋に共時的な観点からこの意味的違いを説明する論理が必要であり，それがこの分析の最初で最大の問題である．

2.2. 二重構造の問題

前項とも関係するが，(3) はさらにそれを est-ce que 型の疑問文 (= (5a)) にすることができるが，その非倒置形 (= (5b)) は存在しない．

(5) a. Est-ce que c'est que Pierre est malade ?
b.* C'est que c'est que Pierre est malade ? (Jones 1669: 473)

2.3. モーダルな副詞の挿入

これはむしろ 2.1 の根拠の一つと考えた方がいいかもしれないが，(3) にはモーダルな意味を表す副詞 peut-être を挿入することができるが，(2c) にはできない．

(6) a. C'est peut-être que Pierre est malade.
b.* Est-ce peut-êre que Pierre est malade ? (Jones 1669: 473)

(2c) を (3) の倒置形であると分類するためには少なくともこれら 3 つの問題に対して納得のいく答えが用意されなくてはならないだろう．

3. C'est X 構文の多様性と連続性

(2c) の原形として想定した (3) は，さらにこれを一般化すると

(7) C'est X

という形に定式化することができ，(3) はこの X 部分が接続詞 que によって導かれた節である，という構造になっている．問題を複雑にしているのは (7) が X 部分に様々な要素を取り得，それぞれが全く異なった統語的性質を持ちながら相互に類似した意味構造をもち，時に同一のものとして扱われてしまうことによるところが大きい．この構文の共通性と連続性について整理してみたい．まず X に来るものとしてそれが単独の要素であるものと，二つの要素からなるものとで大まかに二分できるだろう．

3.1. X が単一の要素であるもの

この場合，基本的な機能は X の提示であるが，c'est の部分で何らかの主題を漠然とではあるが受け，それに対して X を提示するという性質をもつことが多い．X は単一の意味的まとまりを構成するもの (syntagme) なら，いかなるものであってもよい．(3) は X が que 節の例だが，これ以外にも

(8) a. （これは何かと聞かれて）C'est un dictionnaire.
b. （美しいものを見て）C'est beau !
c. La Tour Effel c'est à Paris.
d. Voir, c'est croire.

のようなものが可能で，(8a) は名詞，(8b) は形容詞，(8c) は前置詞句，(8d) は動詞である．

3.2. X が二つの要素からなるもの

これは 3.1 の表現が最初にあって，主語にあたる ce の内容を後から添加・説明するような文として派生したものであろう．この場合も様々な要素からなっているが，それらは共通して

(9) C'est A + Comp + B

という構造になっている．Comp は補文標識 (complementizer) を表し，フランス語では qui, que, de がこれにあたる．ただし，この場合も X が A と B の二つの部分に分けられるというだけであって，X 全体は文相当のものとして一つのまとまりをなしている．(9) の構造を持つ文は分裂文 (clivage) と呼ばれるが，さらにこれも仮主語の構文と強調構文とに分けることができる．

3.2.1. 仮主語構文

これは ce の部分を形式的主語，comp + B の部分をその内容と分析可能なもので，

(10) (comp +) B est A

という関係が成立する．

この場合，B の位置に来るのは主として，名詞と動詞である．以下は Petit Robert

の例文である．

(11) a. C'est un gros défaut que l'orgueil.
b. Ce serait une erreur {que prétendre/ que de prétendre}.

(11a) では名詞 l'orgueil が，(11b) では動詞 prétendre が que prétendre あるいは que de prétendre の形で名詞化されたものが主語になっている．また，辞書等にはあげられないことも多いが，comp + B が名詞節の用例もある．

(12) C'est dommage que tu ne sois pas venu. (Bourciez 1967: 387)

3.2.2. 強調構文

これは構造上 B を単に焦点化しただけであって B と A を être で結ぶことができないものである．ここに分類されるものにも実際は多様な要素がある．comp の種類によって分けるなら

(i) 関係代名詞主格

(13) C'est vous qui le dites! (*Petit Robert*)

(ii) 関係代名詞目的格

(14) C'est la clé qu'elle cherche.

(iii) 接続詞

(15) C'est hier soir qu'il est venu chez moi.

しかし，これらは焦点化される対象が文中のいかなる要素をしめるかという違いだけであって，いずれも B の要素を焦点化しているという点では共通である．

3.3. 疑問文中に用いられる C'est X 構文

本稿で問題にしている est-ce que もこの構文の変種であるが，3.1 および 3.2 で述べた c'est X 構文の多様性に対応して，最低でも 2 種類の est-ce que を認めなくてはならないと思われる．

(16) a. oui もしくは non で答えられ，文全体の真偽が問題となる全体疑問文 (interrogation totale) で生じる est-ce que
b. 部分疑問文 (interrogation partielle) と呼ばれる文の要素を尋ねる疑問文に生じる est-ce que

(16a) が本稿で問題にする est-ce que で，(2c) のようなものである．形の上では (3)，すなわち 3.1 で述べた X が que 節であるものの倒置形だが，この分析には問題があることを 2 で述べた．これに対し，(16b) はいわゆる疑問詞と共に用いられる疑問文であり，共時的体系からいえば，3.2.2 で述べた強調構文の倒置形であると分析可能なものである．実際 (13)～(15) で強調されている部分を疑問詞におきかえて WH 移動を行うと以下のような正しい疑問文が出力される．

(17) Qui *est-ce qui* le dit ?
(18) Qu'*est-ce qu'*elle cherche ?
(19) Quand *est-ce qu'*il est venu chez toi ?

ただしこの est-ce que の comp の部分は 3.2.2 で述べた多様性をそのままひきづっている．(17) の qui は関係代名詞主格でそもそも形が異なっているし，他の 2 つは同じ形 que でも (18) は関係代名詞目的格，(19) は接続詞である．

しかしこのように見てくると，est-ce que 構文の多様性は (19) の部分で連続していることがわかる．(19) はよりエレガントで正しいとされる

(20) Quand est-il venu chez toi ?

のバリエーションである．この (19) と (20) が等しいとすると，そこから疑問詞 quand を取り除いた部分も等価であるという再分析は自然である．そうすると

(21) a. *Est-ce qu'*il est venu chez toi ?
b. *Est-il* venu chez toi ?

という対応関係ができあがる．ここにいたって (21a) の est-ce que は (21b) の est-il と同じ働きを担っていることになり，疑問文の標識としての (16a) そのものになるのである．実際のところ，est-ce que を扱ったほとんどの文法学者は (16) の (a) (b) を全く区別せず同じものとして扱っている．[2] le Bidois & le Bidois (1967) をはじめとして，Grevisse 7ed (1959)，朝倉 (旧版 1955)，Arrivé & Gadet et al (1986) などが

c'est . . . que すなわち強調構文の倒置形としているのは (16b) を念頭に置いているからであろうと思われる.[3)]

(16b) に関する限り，確かに (13)〜(15) と (17)〜(19) の対応は完璧で妥当性は高い．疑問文における疑問詞は，まさにそれが焦点になるのであるから構文使用のための動機も成立している．だが，(16a) には強調すべき対象がなく，その種の動機が存在しない上，(9) における A はこの構文の核であるから，これを欠いては統語的に強調構文にはなりえないだろう．(16a) も含めた est-ce que の統語分析としては強調構文の倒置形は成立しないと思われる．

4. 通時的考察

それでは，そもそもこの表現は通時的にどのような変遷を経て成立してきたのだろうか．現代語における疑問文の体系を見ても，通時的変遷を見てもフランス語における疑問文の標識は倒置であることは間違いないだろう．現代フランス語では倒置は代名詞主語によってなされるが，古くは名詞主語も倒置の対象であった．Brunot & Bruneau (1937)[4)] のあげる次の例は，その頃の 12 世紀のもので，主語代名詞ceは指示代名詞としての実質をそなえていると思われる．

(22) Que est ce donc ?

(*Le Roman d'Énéas* in Brunot & Bruneau 1937: 601)

「それ (ce) は何 (que) である (est) か．→あなたは一体何をおっしゃるのですか.」のように解釈され，est も ce も語本来の意味を保持しており，正に est-ce que に発展する起源とみなすことができるだろう．ただしこの段階では est-ce que の que はまだ生じていない．

次の段階はこの ce が形式主語化し，que 以下の実主語を従えるものである．

(23) Quei est ço [. . .] que faire devum [= devons]

(*Livres des rois*, in Grevisse 1986: 653)

まず，「それは何であるか (Quei est ço)」と代名詞で疑問の対象を提示し，しかる後に「我々がしなくてはならないことは (que faire devum)」とその内容を補うものである．(23) は 12 世紀のもので，この頃すでに分裂文形式による疑問の強調形が成立していたらしい．構造上は現代語の

(24) Qu'est-ce que vous avez ?

と同じ（「それは何か (qu'est-ce)」+「あなたの持っているものは (que vous avez)」→「あなたは何を持っているのですか」）で，ここに至って est-ce que 全体が一つのマーカーとして意識される道が開かれることになる．Price (1971) によれば，Froissart (1337–1410?) が，この (24) 型の構文を多用しており，14 世紀頃に次第に分裂文的な意味が弱まって単なる疑問の一形式になっていったのではないかと推測している．さらに Brunot & Bruneau (1937) は 15 世紀になると

(25) a. Qui esse (est-ce) qui m'a frappé ?

(*Mystère du Vieux Testament*)

b. Qui est celui (cil) qui m'a frappé ?

(25a) が (25b) に代わって使われるようになり，この時期に est-ce que が疑問のマーカーとしての位置を確立し (16a) 型の est-ce que もこの時期に出てきたとしている．ただし，証拠となる用例はあげておらず，(16b) から (16a) が派生するプロセスについては何も述べていない．(25) における (a) (b) の違いと，(16) における (a) (b) の違いは全く別のものであり，同列に論じることはできないだろう．(16a) 型の出現については 14 世紀としている学者もいるようだが，Grevisse (1986) はかなり慎重で，実例とともに 16 世紀になって初めて現れたと考えている．Dauzat (1952) もはっきりと (16ab) の違いを論じ，16 世紀になって関係代名詞の que 以外に接続詞の que が est-ce que の que として用いられるようになったと指摘している．一方 Brunot & Bruneau (1937) には，16 世紀に comment や pourquoi など，que 以外のあらゆる疑問詞について est-ce que のつかない単純形 (forme simple) と est-ce que のついた強調形 (forme d'insistance) が平行して用いられるようになったという指摘がある．このようなことを総合して考えるなら，16 世紀に est-ce que が 3.2.2 の強調構文的な働きをもちつつ疑問文の構造としてできあがり，(19) から (21) のような分析を経て (16a) 型が成立したというのが筆者の推測である．いずれにせよ (23) が 12 世紀であることを考慮すると，(16b) から固定表現化を経て (16a) の表現が生まれるまでにはかなりの年月を要したことはまちがいない．est-ce que は疑問のマーカーとして最終的には一つにくくられるものの，(16ab) の文法構造は本質的に異なったものであり，共時的にこの二つに適応できる分析を与えることは容易なことではない．

5. 固定化

現在多くの文法書や学習書の記述はこれを疑問を表す固定した慣用表現 (figé) として扱っている．個々の単語が本来もっていた意味的機能を失い内容語が文法的な機能をになう機能語に変化していくプロセスを文法化とよぶが，est-ce que が歴史的にたどってきた変遷も，広い意味でこの文法化の一種と考えてよい．ただ，est-ce que はその構成素が本来的にも機能語であり，典型的な内容語から機能語への変遷という図式にはあてはまらないので，ここでは固定化とよぶことにする．固定化は構成素の側から見ると本来持っていた意味の喪失である．est-ce que は何段階かにわけてこの固定化が進行していったとみることができる．

5.1. ce の指示性の喪失

最初の固定化は主語として用いられた ce がもつ前方照応の指示代名詞という性格の喪失である．(22) の段階では指示性が残っていると見ることができるが，(23) のような分裂文的性格を帯びることによって，形式主語としての機能語に固定化が進んでいったのである．(23) は 12 世紀であるから，かなり早い段階でこの固定化は行われたといえるだろう．

5.2. être の述定化機能の喪失

次の段階は être の述定化機能の喪失である．(22) のような (23) 型の構造が出現した当初は「それは何か，あなたが持っているのは」のように分裂文的な意味を残し être も述定機能を保持していたと考えられる．がやがて (23) 型が多用されるにつれて強調の意味は弱まり，単に「あなたは何を持っていますか」の意味となって est-ce 部分が疑問のマーカーとしての意味しか持たなくなってくる．このプロセスは想像に難くないし，実質的な証拠をみることもできる．まず，être はかなり早い段階から無変化であること，さらに est-ce que 全体が esse とつづられていたことなどがあげられるだろう．以下は Grevisse (1986)12e が引く例だが，いずれも中世のものである．

(26) a. Ou EST ce que nous verrons Dieu ? (Cent nouv. nouv., LXIII)
b. Qu'ESSE que devendray ? (*Roman du chastelain de Coucy*)

(26a) は nous verrons とあるから未来のことであるが，est と現在形のままだし，(26b) では est-ce が esse とつづられている．

ただし，この固定化は一方向に単純に進んでいったわけではない．Grevisse

(1986) によると 17 世紀までは être の形にかなりのバリエーションがあったらしい．次の例は 17 世紀のものである．

(27) Mon Dieu, mon Dieu, quand SERA-ce / Que mes yeux verront ta face ?
(Conrart, in Grevisse 1986: 653)

現在の普通の文体なら quand *est*-ce que . . . となるところが，主文の時制と同じ未来形におかれている．これは être がまだその本来の機能を保持していることを示している．

5.3. 焦点化機能の喪失

最後の段階は est-ce que のもつ焦点化機能，すなわち強調構文的解釈の喪失である．この段階に至って est-ce que 全体が疑問のマーカーとして固定化し，(16b) から (16a) への派生が可能となるのである．16 世紀に où や que 以外の疑問詞について (20) 型と (19) 型が平行して用いられるようになっているが，当初は Brunot & Bruneau (1937) が forme d'insistance と呼んでいるように (19) は (20) の強調形であったと思われる．すなわち焦点化機能を持っていたわけである．(20) がいつから現在のように強調の意味が弱まり，(19) の単なるバリエーションになったのかの判定は難しい．疑問詞は強調するしないにかかわらず疑問文における焦点であることには変わりがないからである．一方全体疑問文に用いられる (16a) の est-ce que には焦点化される要素がないのだから，est-ce que の固定化は必要条件であり，(16a) の出現をもってこの第三段階の成立とみることも可能だろう．

6. 部分疑問文の共時的分析

文法現象は，通時的発展とは無関係に，それぞれの時点における体系的観点から再解釈をうけるものであり，文法化や固定化などの派生を繰り返していくものである．以下では現代フランス語の疑問構文という体系全体から est-ce que を再解釈する余地がないかを検討する．

この分析の動機には，現代語における est-ce que が必ずしも完全に固定表現化していない部分があり，構成素単位の分析の余地を残しているということがある．通時的な発展段階として第二段階までの，すなわち (16b) の est-ce que に限定して考えるなら，強調構文としての分析によって記述的妥当性を得ることができる．その場合，

(28) a. C'est quand qu'il est venu chez vous ?
b. Quand est-ce qu'il est venu chez vous ?

(28b) は (28a) の倒置形と記述されることになるだろう．通時的発展を見た場合 (28a) の形は (28b) の形よりずっと後になって生じたものであり，(a) を基本形にしてその派生としての (b) を想定するのはいささか奇妙に見えるかもしれない．しかし (28b) が当初疑問文の強調形というニュアンスを持っていたとすれば，それは疑問としての倒置変形の後に強調変形が加わったものである，とみなすことができ，結局は (28a) の構造と体系的関連づけをおこなっていることに他ならない．共時的には A + B を B + A と等価であるとみなし，構造変形として理解しやすい形を基本形にすえる，という理論的操作も許されるだろう．生成文法における D（深層）構造と S（表層）構造の区別はこのような考え方のより極端な例である．(28a) を (28b) の基底形として据える，という考え方をより古い形にも適応させれば

(29) Qu'est-ce que vous avez ?

の基底形として

(30) C'est QUE que vous avez ?

という形を想定するということである．que は弱形でアクセントのおちる位置には生じないから (30) はこれまで一度も出現してこなかったし，現在も存在しない．しかし (29) のもっていた歴史的意味は (30) の倒置形として理解されるものと同じであり，強調の意味が弱まったにせよ que 部分が焦点になっていることにはかわりがないのだから，現代語にあっても妥当な分析であると筆者は考える．

現代語において est-ce que が完全に固定化しているわけではないとするいくつかの指摘は，この強調構文型分析を示唆するものが多い．

6.1. est-ce qui の形の存在

主格要素を尋ねる疑問文は

(31) Qu'est-ce *qui* est arrivé ?

と que の代わりに qui が用いられるから，この場合の qui, que は格を表す機能を

担っており，固定表現の単なる一要素ではない．(2c) が (3) の倒置ではないと主張した Jones (1669) は基本的に固定表現という立場をとるが，(31) の存在を指摘し，結局 est-ce que をどう分析したら妥当かという結論を出してはいない．ただし，部分疑問文 (16b) に限定すれば，強調構文の倒置形になる．

6.2. 副詞句の挿入

est-ce que の est-ce と que の間に副詞句を挿入することが可能である．

(32) a. Est-ce *vraiment* que tu veux y aller ?
b. Est-ce *demain* que tu pars ? (Arrivé & Gadet et al. 1986: 350)

vraiment や demain をここに入れられるということは est-ce que 全体が固定していないことを示す．(32) も vraiment や demain が c'est . . . que による強調の対象になっているという分析が可能で，強調構文の倒置形という分析を支える．

7. 全体疑問文の共時的分析

それではいよいよ (16a) の全体疑問文の共時的分析について考えてみたい．最終的には (16ab) を完全に別のものとするのではなく，(16b) も含んだ est-ce que 全体が統一的に説明できることが望ましい．

7.1. 構成素分析の可能性

(16a) 型については (b) 型と異なり，構成素分析の可能性を示唆する現象はあまりない．この表現の成立には 5.3 で述べた固定化が必要であり，(b) 型とは事実上異なっていることを示唆する．(16ab) を区別せずにあげられた est-ce que が固定化していないとする現象について (16a) 型の観点から見てみよう．

7.1.1. 副詞句の挿入

Arrivé & Gadet et al. (1986) があげる (32) の例は est-ce と que の間に入った要素が強調の要素になっていると考えられるものだが，Grevisse (1986) は alors, donc, déjà ような副詞もここに入ることができると指摘している．もしこれらの副詞が全体疑問文の Est-ce と que の中に見いだし得れば，この部分が疑問の焦点とは考えられないから (16a) にあっても est-ce と que を遊離する根拠となる．だが Grevisse (1986) があげる例は以下のようにすべて疑問詞を伴う部分疑問文のものばかりである．

(33) Qu'est-ce DONC que j'attends encore d'un livre, aujourd'hui ?
(Gide, in Grevisse 1986: 652)

実際の用例を検索してみても，Blanche-Benveniste et al (2002) の口語コーパスの中にも 1997–2004 にいたる全 Le Monde の記事の中からも est-ce と que の間に他の要素が含まれているものは，次例を除くと 1 例も見いだすことはできなかった．

(34) Pourquoi cette aspiration chez une partie des homosexuels ? *Est-ce* donc *que* le pacs, comme cela nous revient, est insuffisant pour régler les aspects matériels de succession, de fiscalité bref, de patrimoine ?
(*Le Monde*, 18 juin 2004, p. 34)

(34) は pourquoi の直後に生じていることからもわかるように，理由を応えているものであり (3) 型の説明文の疑問文で，純粋に oui/non を尋ねる疑問文ではない．

7.1.2. être の時制

être の時制について 17 世紀までは様々なバリエーションがあったことはすでに指摘したが，Arrivé & Gadet et al. (1986) によれば，現在でも改まった文章などでは現在形以外の活用もするらしい．

(35) Serait-ce qu'il aurait eu peur ? (Arrivé & Gadet et al. 1986: 350)

(35) は一見すると (16a) 型であるから，être の述定機能が残っていることの証拠となるかもしれないが，Grevisse (1986) は le Bidois による同様の例について，前文説明として用いられた (3) のような形を推量の疑問文においたものと理解されると指摘している．検索しても実際の用例は極めて少なく，譲歩を表す ne serait-ce que を除くと前文に対する解釈を求めたもので，Grevisse (1986) が解釈したとおりである．

(36) Le courrier des lecteurs du 8 avril n'est composé que de lettres masculines, six au total. *Serait-ce* que les femmes ne savent pas écrire ? *Serait-ce* qu'elles n'ont rien à dire ? *Serait-ce* que ce qu'elles ont à dire est bien moins intéressant que ce que peuvent dire les représentants de la gent masculine ?
(*Le Monde,* 14 avril 2004, p. 30)

7.1.3. 否定の可能性

Arrivé & Gadet et al. (1986) は est-ce que 自体を que 以下の主要部とは独立して否定におくことができる，という事実をあげている．

(37) a. N'est-ce pas qu'il aurait eu peur ?
b. N'est-ce pas qu'il n'aurait eu peur ?

(Arrivé & Gadet et al. 1986: 350)

(37ab) はニュアンス的にも異なっており，est-ce que の否定が可能であることの証拠となる．(37) は文脈なしにあげられた作例で，(3) のような説明的用法の可能性も残すが，現実の用例をみると，確かに純粋に est-ce que の否定形と考えられるものもある．

(38) [. . .] les cadeaux de Noël restent un sacrifice véritable à la douceur de vivre, laquelle consiste d'abord à ne pas mourir", concluait-il après avoir examiné une série de fêtes traditionnelles où les plus jeunes personnifient les morts. "N'est-ce pas qu'au fond de nous veille toujours le désir de croire, aussi peu que ce soit, en une générosité sans contrôle, une gentillesse sans arrière-pensée ?", ajoutait-il. Croire encore au Père Noël, le temps d'une nuit de décembre.

(*Le Monde*, 24 décembre 2003, p. 19)

結局この否定の可能性のみが est-ce que を固定表現から遠ざけている唯一の性質ということになる．しかし疑問形にするということは述定のあり方に関する操作であり，固定表現全体が肯定や否定におかれる余地を残しているというだけであるから，(16a) の est-ce que は全体が疑問のマーカーとして固定表現化している度合いがかなり高いと言えるだろう．

それでは (16ab) は完全に別のもので，(16a) は固定表現として est-ce que 構文全体の共時的分析はあきらめなくてはならないのだろうか．筆者は必ずしもそうとは考えていない．まず，est-ce que には構造上倒置が内包されており，これを固定表現として別だてにしなくても，すべての疑問形式を倒置に還元して記述する可能性が残されている，ということがある．さらに，ほとんどの研究者が (16ab) を同じ構文だと見なしているように，仏語話者の直観の中にこれらを共通のものととらえる感覚が内在しており，C'est X 構文のもつ共通部分を抽象化し，それと倒置をあわせることで体系的に統一のとれた記述が可能になるのではないか，と思うからである．

7.2. C'est X 構文の共通性

3 で，この構文の連続性をみたが，それらすべてに共通しているのは X を提示するということ，そして提示のされ方が環境によって補完されるということである．これを「X の α 的提示」というようにまとめ，α を環境変数というようにしておきたい．α の補完はデフォルトでは ce の対象を環境から探すことによって満たされる．W, c'est X というような環境のもとに生じた c'est X は W est X というように W に X という属性を付与するというような解釈が生まれることが多い．しかしこの解釈はあくまで W が提示された環境の中で X を提示したときの最も自然な文の意味であって，c'est X という語列自体にそのような意味があるとは考えない．

(39) C'est le printemps.

(39) も le printemps（春）を提示することに意味があるのであって，日本語の「春が来た」に相当するような文の意味をになう．このとき，ce を主語としてその対象を満たすものを探し，「それが春なのだ」と言っているわけではない．c'est X という語列はあくまで X の提示機能しかなく，α を環境によって補完してくれと投げ出している表現なのである．(39) が用いられる多くの環境では le printemps の提示だけで伝達意図は満たされ，α が補完されたことになっているのである．口語の C'est dingue !（すごい）なども，ただ dingue という叫びを提示するだけであって，α の補完は環境に委ねている．その結果その叫びを聞くものは何らかの対象が dingue であるというように α を補完しようとする方向に解釈が導かれることになる．

一方，α の補完機能が構造上保証されれば，α の実態として ce の内容を埋める必要は全くなくなる．仮主語の場合は que 以下の内容を形式的に先取りし述部部分に焦点をあてる，ということで α が満たされる．強調構文の場合も同様で c'est A comp B の A の部分に焦点をあてる形で X (= A comp B) を提示するということで α が満たされ，ce の中身がゼロであってもよい．こう考えるなら c'est que . . . の場合も est-ce que と倒置されることで，疑問というあり方で X (que 節) を提示したことになり，α の補完が満たされたと考えることができるのである．

7.3. 共時分析試論

筆者は従って (30) を (29) の基底形に添えたように，(3) を (2c) の基底形に添えたい．(3) がこのままの形で出現すれば，α が文脈上補完されなくてはならないの

で前文の説明という意味を帯びるが，(2c) のように c'est que が倒置され，疑問というあり方で提示されると，その統語操作によって α の補完は満たされ，純粋な疑問文として成立するのである．

(40) Après avoir disculpé treize de ses coaccusés, elle les a à nouveau impliqués dans les viols subis par ses enfants. « Quand *c'est que* vous dites la vérité ? », a interrogé le président. (*Le Monde*, 26 mai 2004, p. 12)

(40) も quand による疑問文の中におかれ，疑問の対象の強調提示ということで α が補完され，前文の説明のような意味は必要なくなっていると考えられる．いずれにせよ (40) のような構文の存在[5] は (3) を (2c) の基底にすえる根拠の一つとなる．2.1 で述べた意味の不等価性の問題はこうして解決できる．次に 2.2 の二重構造の問題だが，これも (5b) はあくまで (5a) の基底構造として存在しているが，このままの形では文脈上 α を満たすことができないので出現できないと考えればよい．2.3 のモーダルな副詞の挿入の問題は，est-ce que に限らず疑問文とこの種の副詞は親和性が悪いのであって，そのために (6b) の容認度が下がっているにすぎない，と考えることもできるが，peut-être と疑問文が共起している実例も数多くあり，ここは est-ce と que の間に別要素を挿入できないという 7.1.1 で述べた現象の一つの表れであると考えた方がよい．これは全体疑問文の est-ce que は固定化が進んでいるということであるが，本章の議論はそれを認めた上で共時的な説明の可能性を探るものであるから，その議論と (3) を (2c) の基底に据えてはならないという議論とは別のものであると考える．

8. 結　論

全体疑問文における est-ce que は疑問を表す固定表現であり，教授する場合もこの全体を一つの表現として教えるのがよい．だが，その構造の分析として (3) を (2c) の基底形のように示すことは意味の無いことではない．これによって疑問の本質は倒置にあることを教えることができ，ただ単に表現全体を丸暗記するより，覚えやすいし忘れにくいからである．ただし通時的議論と共時的議論を区別し，その留保を加えた上で臨機応変に用いるべきであろう．

注

*) 本考察は筆者が連載している月刊誌『ふらんす』2006 年 7 月号の記事に対していただいた木下光一先生のコメントがきっかけである．筆者が同記事の中で Est-ce que 型疑問形は

C'est que . . . の倒置形という分析についての疑義を示され，本稿でも引用した数多くの文献を示されご意見をいただいた．ここに深く感謝したい．

1) 以下特に断らない限り，用例のイタリックは筆者による．

2) はっきりとその違いについて言及しているのは Dauzat (1952) くらいである．le Bidois & le Bidois (1967) に至っては，(16b) の表現について « sortie par inversion de *c'est . . . que* » (p. 363) と断言してBourciez (1967) を引くのだが，Bourciez (1967) の方は (16a) について « sortie par inversion de *c'est que* » (p. 706) といっているにすぎない．

3) 前 2 者の，校閲者が代わった新版では Grevisse 12ed (1986)，朝倉 (2002) ともに記述が改められている．

4) 筆者が参照したのは 1937 年の第 2 版だが，その後改訂が加えられ 1999 年に 4 版がでている．版によってページも内容も異なる．

5) Brunot & Bruneau (1937) によるとこの「疑問詞 + c'est que」形は中世から存在している．Quand est-ce que . . . の基底形は従って，C'est quand que . . . と Quand c'est que . . . の二つがあることになる．

参考文献

Arrivé, M. & F. Gadet et al. (1986) *La grammaire d'aujourd'hui: guide alphabétique de linguistique française*, Flammarion.

朝倉季雄 (1955)『フランス文法事典』白水社.

朝倉季雄 (2002) 木下光一校閲『新フランス文法事典』白水社.

Blanche-Benveniste, C. et al. (2002) *Choix de textes de français parlé : 36 extraits*, Honoré Champion.

Bourciez, E. (1967) *Elements de linguistique romane*— 5. ed révisée par l'auteur et par les soins de Jean Bourciez, Klincksieck.

Brunot, F. & C. Bruneau (1937) *Précis de grammaire historique de la langue française*, Masson.

Dauzat, A. (1952) *Grammaire raisonnée de la langue française*—3e ed., IAC.

Grevisse, M. (1959) *Le bon usage : grammaire française avec des remarques sur la langue française d'aujourd'hui*—7. ed., Duculot.

Grevisse, M. (1986) *Le bon usage: grammaire française*—12e edition refondue par André Goosse, Duculot.

Jones, M. (1969) *Foundations of French syntax*, Cambridge University Press.

le Bidois, G. & R. le Bidois (1967) *Syntaxe du Français moderne: ses fondements historiques et psychologiques* tome 1, A. Picard.

Martinon, P. (1927) *Comment on parle en français: La langue parlée correcte comparée avec la langue littéraire et la langue familière*, Larousse.

Price, G. (1971) *The French language: present and past*, E. Arnold.